



▲バケツに水を汲んだら、準備完了！



▲いよいよ出陣。担ぎ手の皆さんにも気合いが入ります



▲子どもたちは太鼓台を引いて、竜を先導しました



▲ほら貝を吹く部隊が、合図を出します

仁尾竜まつりが ダイドードリンコ日本の祭り2018 に選ばれました！



▲ダイドードリンコ日本の祭りから、「認定の証」を受け取りました

ダイドードリンコが全国各地の祭りを支援している活動「日本の祭り」(2003年～)に、今年、仁尾竜まつりが選ばれました。祭り当日には、東日本国際大学学長・教授で考古学者の吉村作治さんをはじめとする日本の祭り関係者が集まり、懇談会を行いました。

また、この認定に伴い、下記の日程で特別番組が放送されます。ぜひ、ご覧ください。

放送日時 9月17日(月・祝)
午後1時55分～
放送局 RSK 山陽放送



▲「せいっ」の掛け声で、息を合わせて差し上げ



仁尾雨乞い竜実行委員会
会長 曾根満さん

現在30人のメンバーが竜のうろこや骨組み、担ぎ棒作りを行っています。作業の手間はかかりますが、青竹を採ってきて担ぎ棒を作ったり、目が光るように細工をしたりと、見栄えのいい竜を作り続けてきました。しかし、ほとんどが70歳以上です。若い世代の人にも、もっと参加してほしいと思います。

祭りは地域を盛り上げ、子どもの記憶にも残るものです。そこで、「市民が楽しみ、子どもが輝く、真夏の感動」をテーマとして、子どもが主役となって楽しめる内容を考えてきました。最近では、竜の担ぎ手も毎年増えています。地域の活性化のために、この祭りを大事にしていきたいですね。



仁尾竜まつり実行委員会
会長 西山弘茂さん

竜に水あぶせつ



写真でみる地域のできごと



ミトヨノヒトコマ
ハイライト

▲稲わらで手作りした迫力ある雨乞い竜。沿道のお客さんが竜に向かって水をかけると、担ぎ手もびしょ濡れに

恵みの雨を祈願して
長さ35メートル、重さ3トン。8月4日(土)、稲わらで作られた巨大な竜が約250人の担ぎ手によって、仁尾のまちを練り歩きました。雨乞い竜の起源は、江戸時代までさかのぼり、昭和14(1939)年までは、大干ばつのたびに竜が作られていたが、その後途絶えてしまうことに。しかし、昭和63(1988)年、瀬戸大橋博覧会のイベントをきっかけに復活。それから仁尾竜まつりが始まりました。
今では、みとよを代表する祭りとなり、雨乞い竜の水あぶせには、多くの観客が集まります。子どもも大人も、竜と担ぎ手を目がけて、容赦なく水を浴びせられるのが、祭りの醍醐味。担ぎ手たちが掛け声に合わせて竜を差し上げると、会場の熱気は最高潮に達しました。



▲地域に伝わる竜おどりと仁尾踊り。踊り連が伝統を引き継いでいます



▼曾保小学校の児童は、一輪車で華麗な技を次々と披露しました



▲一体感のあるソーラン節で会場を盛り上げた仁尾小学校の皆さん

仁尾 第三十二回 まね竜まつり